

# 粋な土産 芸舞妓の心



春のおどりの公演でにぎわう京都の花街で、芸舞妓がデザインした特製グッズの販売が始まった。伝統を守りながらも、ファン層の拡大に向けた新たな取り組みだ。

五花街の一つ・宮川町(東山区)。21日まで「京おどり」が催されている宮川町歌舞練場の販売コーナーに手ごろな土産品が並ぶ。ボールペンにリップクリーム、駄菓子……。金平糖の小箱には着物姿の舞妓や宮川町の紋章「三ッ輪」がデザインされ、あぶらとり紙の表紙には風情ある格子戸や餅花が描かれている。

特製グッズを作ったのは約65人の芸舞妓が加盟する宮川町芸妓組合。京おどりの期間中に歌舞練場で限定販売するグッズの制作に、今年、芸舞妓が初めて参加した。昨春の京おどりの直後から、絵の上手な芸妓3人が中心になって、お座敷

## ペンや駄菓子「かわいい」

春のおどりの公演でにぎわう京都の花街で、芸舞妓がデザインした特製グッズの販売が始まった。伝統を守りながらも、ファン層の拡大に向けた新たな取り組みだ。

## ファン拡大へ考案

や稽古の間に7種類の商品のデザインを考えた。来年からは男性客を対象にした商品も企画したいという。組合長で芸妓のふく葉さんは「人任せではなく、自分たちで新しいことを始めるという意識を持つようになった。多くの人たちに宮川町は楽しい場所と知ってもらいたい」と語る。

観客にも好評で、商品を買った左京区の飲食店員平



田佳織さん(23)は「こんなにかわいらしいデザインを芸舞妓さんが考えたなんてびっくり。縁起もよさそう」と話した。

「都をどり」が30日まで開かれている祇園甲部歌舞練場(東山区)でも、芸舞妓が舞台で着た京友禅の衣装を再利用し、財布(がま口)やおい袋などを限定商品として販売している。

毎年、1カ月に及ぶ公演で使われた衣装は公演後に倉庫で保管してきたが、「グッズでも都をどりを楽しんでほしい」と企画。業者に依頼して、2007年から商品に作り替えて売っている。今年は、桜の花びらを入れた特製あめのほか、ちようちゃんやうちわを描いたマグネットも新たに販売している。

祇園甲部歌舞会の事務局の小村浩久さん(45)は「1カ月の公演で衣装も傷んでしまうが、きれいな部分を選び抜いてグッズにしている。都をどりの記念や思い出にしてほしい」と話している。(岡田匠)

- ①宮川町の芸舞妓が製作したオリジナルグッズを手にする芸妓のふく葉さん
- ②限定販売しているオリジナルグッズ(いずれも東山区)